

七〇八百万円の借金というのが一番死にたくなりそうな金額だねと言っ
んです。

それは何故か。今持っているもの
を失わずに七〇八百万円の借金を返
そうとすると大変なんです。全部捨
てれば何でもないんです。家を叩き
売ればいい。そうすれば七〇八百万
円くらいすぐ出来る。

それが惜しいから、手放したくな
いからと、借金だけを何とか返そう
とするとなかなか厄介な金額なん
です。ですから、ちまちました借金
ほどやはり大変なんです。

大きい借金だとすればある面、開
き直れます。堂々というるところ
で借金の話ができます。こういう経
営者の集まりに來まして、只今借金
が八十億あります！と言えば、聞い
ている方もほーっと感心したりしま
す。只今、借金百万円ですではちよ
つと話にはならない訳です。そうい
うのは総じて元氣だなあといつも思
います。

心の中に棲みついている敵 へ手を打て

自ら借りたものは最終的に自ら背
負わなければなりませんけれども、
どういう手を打っていくのか、もう
一度しつかり捉え直してみるとい
うのが必要だろうと思います。

人間はとにかく弱い部分という
のがあります。孫子に山中の敵を
打つは易し、心中の敵を打つは難し
という言葉があります。どんな深山
に隠れている敵であつてもいぶり出

してそれを叩くことはできるけれど
も、一番やっかいなのは自分の心の
中に棲みついている敵です。

つい物事がわかつてきますと、ど
こかゆるみがでて、そこに安住し
がちな心というものが出ます。頭で
はいつまでもこんないい時代が続く
とは思っていませんが、しかしそう
思つていてもやつていることはマン
ネリ化しているようなところがあり
ます。

しかも本質的に人間はどちらかと
いうと怠け者です。言葉は悪いよう
ですけれども、人間というのは、こ
こで今日学んでいるような倫理はあ
まり好きではないようです。少し語
弊があるようですが、倫理へは、堅
苦しくて縛られるような、何か締め
付けられるようなそういう思いをも
つ人が多いというのは、本質的に怠
け者だからです。

倫理はきちつとしたルールを決め
てその中で回していこうということ
ですから、やはり自分自身にある程
度厳しい部分というものを直近に向
けられるということがなければやつ
ていけません。妥協とか現状に安住
したいという気持ちがつい出がちで
すが、企業というのはそこから綻ん
で行くよと言うんです。

しかもトップの生き方というのはに
は下の者は鋭く反応しますから、上
の姿勢がどうなのかというのが問わ
れ続けています。

経営者の一挙手一投足というも
のを、自らがもう一度きちつとする
必要があるのではないかと思うので
す。

直線的反省と直線的実践

直線的反省。

反省は直線的であれというのが
丸山敏雄の考え方です。曲線ではい
けない。そのまま申し訳なかったと
言つてすつと純粋に受け止めていけ
ばいい。

ところが、人は俺にも悪いところ
があるけれども、相手がああだった
こうだったと責任の転嫁をします。
自分がすつと直線的に受け入れられ
ればいいものをなかなか受け入れら
れないで条件を付けるわけです。

もうごちゃごちゃ言うなど。悪
いのは自分。申し訳ありませんでし
たとすつと受ければいいいいわけ
です。いやあ自分もそうだったけれど、
向こうもこうで、ああでというので
は純粋性がありません。

直線の実践。

しかも、実践は直線的であれとい
うのが丸山敏雄の考え方です。その
まま受けてそのままやれというので
す。そこにいらざるいろんなものを
巻き込むと言っているのです。
人は自分の過去の経験とか知識だ
とかいろんなものを総動員して自分
なりに脚色をしてやりたがりです。
ですからきちんとした形にならな
い。

出た結果に対してそれなりに受け
止めれば良いのに、やらないまま、
うまくいかないんじゃないか、失敗
するんじゃないか、これはちよつと
間尺に合わないとかではなく、その
まま受けてそのままやればいいので
す。

反省も実践も直線で、核心部分に
最短コースですつと入つていけば良
いのです。もつてまわつたまどろこ
しい言い方をされますのは自分が傷
つきたくないからです。自分自身を
底う気持ちと言うのは、人間どこか
にあります。

常に自分が立つているポジション
から眼を逸らさずに、そこから自分
を鍛えていく。自分を伸ばす。そし
て企業そのものをますます強靱な充
実した形に仕上げていくというのが
学びどころであると思います。

どうやってプラスにしてい くか

昨年五月に亡くなりました、東京
文京区の小石川に本社がある紅屋オ
フセツの社長、今井寅吉はすつと
税金を納めるが生きがいでした。

彼は一日五百万円の税金を納めら
れるような会社にするのが目標でし
た。五百万円納められるには、売上
がいくらで、利益がいくらでと逆算
ができます。結果については一番出
したときが一日二百二十万円だった
と思います。

彼は、税金をいくら払っているか
というのは、経営者の勲章だよねと
言つておりました。彼にとつての一
番の社会奉仕というのは、いくら国
庫に納めているのが全てだという
ものでした。

時々税務署長を捕まえて、うちに
はいつ来るんですかと言つて回つた
人です。超々優良の納税会社ですか
ら、調査に行くなんてもつての外な
わけです。それでも、うちにいった

この言葉を自分自身の座右の言葉と
して生涯を送つた方だと言われてお
ります。
実は経営者の皆様方も常にそうい
うような状況、言葉は悪いですけれ
ども、いわゆるビジネス戦争の中、
生死を賭けながら日々の舵取りをな
されていらっしゃるだろうと思いま
す。

中小零細の経営者であれ、多くの
方は個人保証という大きな荷物を背
負つていらっしゃる。

引くに引けないような状況の中
で、事業というものを動かしてい
らっしゃるのではないかと思いま
す。

経営者の迫力の源は個人 保証

実は数年前からすつとお付き合
いしている方の中に、滝川精一とい
うキャノン販売の中では中興の祖と言
われている人物がおります。

キャノンが年商五百億円くらい
の時代に代表取締役社長になられま
して、十六年間そのポジションにい
らっしゃいました。その間に、年商
六千億円もの世界的な企業に押し上
げましたのがこの滝川精一という人
物です。

そのような方ですから、もう七十
も後半に向かう年ですが、キャノー
ンの永久役員として今でも常勤のよう
に会社へ足を運んでいらっしゃるま
す。

たまたまのご縁で、彼には、東京
都の倫理法人会の会長をやつていた
だいた時期があります。今は東京都

の名誉会長というポジションで動
いていたいておりますけれども、最
初お会いしました時は、社長を退
かれた後で、代表権を持つキャノ
ン販売の会長でした。さすがに世界
的な企業のキャノンにしかただけの人
物だなと、お会いしまして非常に強
いオーラを感じたものです。そのう
ちに代表権が無い会長になられまし
て、そして相談役になつていかれま
した。

肩書が変わってきますと、今まで
の印象と少しづつ変わってきます。

ある時本人がこう申されました。中
小企業の経営者は凄いいね。年を重
ねれば重ねるだけ迫力が増すねと
おっしゃる。サラリーマン経営者は
まずいよね。肩書が無くなつていく
と段々しぼんでいくよね。と自分の
ことも多少含めながらのお話だった
と思います。

滝川さん、何がそうなる原因で
しうね。とお聞きしたら、個人保
証だよ。個人保証。サラリーマン経
営者というのはそれが無いものね。
だから、ある程度行つたらするつと
逃げられるところがある。

中小企業の経営者はそういかな
いね。会社が傾くということとは自分
の今まで生きてきた人生というもの
を、ある部分否定されていくような
一面というものが出てくる。その土
地に住めなくなる場面さえ出てきか
ねない状態でもある。あれが迫力の
源だろうね、ところおっしゃる。

ある面確かに真理を突いていらっ
しゃるなという感じを受けました。
今日参加されているのは、そういう

いつ調査にくるのかというので、
署長がいやあ滅相もないと言うとそ
れは怠慢だと怒る方でした。

俺のところはこれだけのものを国
庫に入れているのに、調査に來ない
というのはどういうことだと、当然
調査に來るべきではないのかと怒る
方でした。

それで税務署も持て余まして年に
一回くらいお越しになるわけです。
そうすると嬉しくて堪らないわけ
です。本当は毎日でも来ていただき
たいと、そういう方でした。

先生ありがたいよね。あれだけの
プロ集団がタダでやつてきてくれて
診てくれるんだから。自分のところ
では間違いが無いと思つていても、
科目が違つたとか指摘を受けますと
会社のグレードがますます上がる。

タダで指導してくれるのだからあ
れは使わない手はないよねというの
が持論でした。ですから調査に來な
い会社というのは見捨てられてい
るのだと彼は言うのです。毎月でも
来てほしいよと、こういう発想の人
でした。

皆さまも、この厳しい日々の中で、
倫理を楽しみながら皆同じ事柄でも
プラスにして、自分自身を育て、そ
の姿勢が社員の方々へも大きい影響
を与えていかれますことを祈念いた
します。ありがとうございました。

収録
山形市蔵王倫理法人会
広報委員会

保証を背負つていらっしゃる方々が
ほとんどだろうと思います。

中には本当はもう辞めたいんだと
思っている方もおられるかもしれま
せん。こんなに先が見えない、読め
ない時代に、しかし辞めるに辞めら
れないというのが多くの方の状況な
のだろうと思います。

今辞められる方は本当に幸せです
ね。辞めるにしてもタダではありま
せんから、それなりのものがないと
辞められないわけです。

ですから多くの経営者がいくとこ
ろまでいくよりしやうがないなあ
というのが本音ではないでしょうか。
そういう中で踏ん張つて、頑張つて
いただいているのではないかと思
います。

一歩踏み出せばいくらでも 打つ手はある

十年ぶりだったかと思いますが、
実は昨年の二月に広島福田剛とい
う人物からちよつとした贈り物が届
きました。十年もお付き合いが途絶
えた人物なので、貰う理由が何もな
く一体何だろうと思ひました。

中を開けてみましたら多分身近
にあつたものを掻き集めて箱に突っ
込んで送つたものというような状
態で、福田さんらしいなと思ひまし
た。中にお便りがありまして読みま
すと、中西局長が講演会の中で自分
の話をやつていたぞと先日仲間から
話を聞かされたので、思わず嬉しく
なつて身近にあつたものを送らせて
いただきましたということでした。
一昨年の十月の半ばくらいのこと



平成二十一年四月四日

山形市蔵王倫理法人会モニングセミナー

常住戦場

社団法人倫理研究所 普及本部 本部長

常任理事 中西 浩 様

生死を賭けながらの日々の 舵取り

常住戦場ということでお話させて
いただきたいと思います。

この常住戦場という四字熟語につ
いてですが、新潟県長岡というところ
がございます。この地からは歴史
に名を刻んだいろんな方々が出てお
りますが、その中のお一人に、河井

継之助という人物がおります。亡く
なりました司馬遼太郎さんがお書き
になった峠という本の主人公がこの

河井継之助であります。

河井継之助は、長いこと長岡藩の
城代家老を務めて、最終的には戊申
の役に徳川に殉じた方です。この方
が好んでお使いになった言葉が実は
常住戦場という、こういう氣がまえ
のもとでお過ごしになられたのだろ
うと思います。

この思いをすつと引きずつて、や
はり駆け抜けました人物の一人に、
山本五十六という方がおります。
太平洋戦争の中で亡くなつていか
れましたが、山本五十六も好んで、

であつたと思うのですが、ある講演会で確かに福田さんの会社のお話をしたのです。話す予定ではなかったのですけれども、ただ話の流れの中でふと思ひ出して語つたという僅か一コマなのです。それをお知り合いが聴いていて、伝えたのだと思います。

その時は広島県に変わった会社があるというお話をしました。十月頃から三月くらいにかけまして、中学生や高校生が、この会社に千人以上会社訪問をします。それがこ二十年以上ずっと繰り返されている会社なのです。十月ぐらになるとポツポツ、ポツポツと子供たちが会社訪問に来ます。受付のところに、会社の名刺を山のようにしていて、来た子供たちに名刺を差し上げるのです。子供たちはその名刺をもらいたいが為に来るのです。がんばんなさいね。しっかりとしないさいね。夢がかなうといいね。なんて言いながら名刺を渡す。もらった子供は大事そうにそれを手にもって帰っていくというのが、こ二十年以上、福田さんの会社で見られる光景です。

事の発端というのは二十数年前です。地元の国立大学に広島大学というのがあります。地元の方は広大と言っていますが、小さい頃からこの広大に行きたいという夢を持っていたお子さんがいました。

普通、夢を持つのであつたら、それを実現するためにそれなりの努力をしそうなものですが、この子供は努力はしないのですね。ただし夢だけはあります。

そうした学校生活も、やがて高三になると、三面面談で最終的に進路を決めなくてはなりません。成績表を突き付けられながら、お前はここに行きたいんだと聞かれて、第一希望は広大ですと彼は言う。先生は百パーセント無理ですと言う。この成績では逆立ちしても入れるはずはないと。

親の方も、あんたそんな高望みはせずにあなたの頭にふさわしい大学が全国にはあるだろうからそこにしなさいと言う。親にしても入れる見込みがないところを受けさせて、受験料をどぶに捨てようなものです。から。それは先生も親も百パーセント無理だと太鼓判を押しているわけですね。

当人だけが受けると言っている。駄々っ子みたいなものでとうとう最後に親の方が折れて、内申書は適当で結構ですから、とりあえず受けるだけ受けさせていたきたい。無理だとは分かっていますけれども、本人がそれで納得するのだつたらと言つて一応受けさせた。

当然百パーセント落ちる予定であります。これは確定に近い確率ですから。それがなんと引つかつたのです。彼よりはるかに優秀な者がごろごろ落ちたのに、間違つて、どこがどうなつたのか入つたのです。

地元の子供さんというのは受験をしますと氏神さんのお守りだとか、また、厳島神社というのが広島島の近くにありますが、その合格祈願のお守りを手にして受験場に行きます。その子供もそういうお守り

を持つて行つたのですが、他の子供が持つていなかったものをこの子は持つていた。それが福田剛さんのところの名刺だつたのです。どのようにしてそれを手に入れたのかはわからないのですが、とりあえずその名刺をもつていた。どうもこの名刺が効いたのではないかと皆思つたのです。

その名刺というのが、株式会社△□○となつてゐる。これは登記している名前ですから、これが社名です。その子はこの名刺を持つていた。

どうもよく考えてみると×がनावけです。そういう話が少しづつ子供達の中に拡がつていき、今は受験する子供たちがお守り代わりにこの名刺をもらいにくるのです。千名をくだらない子供が寄せて来るような大きな会社ではないのですけれども、社名が△□○と変わつてゐるのです。

元々福田さんという方は、九州は長崎の佐世保の在の出身でして、高校を出ますと東京に出てきて、自分なりに志はあつたと思うのですが、気づきましたら池袋だとか原宿だとか新宿の夜の世界の方に身を染めていました。

最初は客席にいたのが、気づいたらカウンターのの中に入っていましたと、そういう生活をやつていた。しかし心の中で、このままだつたら一生うだつが上がらないのではないか。なんとかしてもう一度、一から出直しをしたいと思います。あの世界にどつぷりとつかつてしまひますとなかなか踏ん切りがつかない。

そこで、彼が二十六歳の時に、もういっぺん田舎に帰つて、そこから気持ち切り替えて、再び東京から大阪へ出てこようと決心し、東京を離れる踏ん切りをつけるための生前葬をやるわけです。

自分で自分の葬式を出すにも当然金は無いわけですから、身近の方々のホステスさんとかお客さんとか悪友の連中とかに、僕は突然亡くなつたのでお通夜を何日にやるからと言つて仲間を集めたわけです。これは、東京におさらばする踏ん切りをつける策であり、もうひとつは田舎に帰るにも先立つものはなかつたということです。先取りの香典をいただきたいということでしょうか。それで九州へ帰ろうとします。

たまたまその話を聞いた弟が当時広島におり、仕事が忙しいというところで、兄貴、九州に戻るんだつたら途中の広島で下車して二、三ヶ月仕事を手伝つてくれないかと言われたのが三十八年前のことです。それで本人は二、三ヶ月のつもりで途中下車しました。それから今日までとうとう佐世保には戻らずに、ずっと広島に留まつてしまひました。

独立をなされましてこの会社の看板を背負ひまして、今年で三十五期になります。人もいない、物も無い、金もない、実績も信用も無いという無い無い尽しの中で独立して仕事をしようとなされました。

パーティーシヨンの設置・製造・販売がこの会社の主力商品です。なんとか事務所を設けてスタートを切られたものの、つなぎ資金もないしお

金をかける分は何もないわけですから。せめて一目見て覚えていただけるようなユニークな社名をということと考えたのがこの社名です。

屋根は△。窓は□。人の顔は○。この発想から△□○になつたのです。なかなかこれを社名として認めていただくことができずに、登記のために何度も足を運んでやつとこれで通つたものの、これをさんかくしかくまるとは呼ばないのです。これはみよまるといふ会社です。名刺をいただきますとルビが入つていないものですから、何と読むのだろうと皆悩みますね。とにかくユニークな社長さんであります。

覚えてもらうために社名は付けたけれども、今度はこれを宣伝しなければならぬ。宣伝広告費なんかありませんから、彼は自分のスーツに△□○を金の刺繍で入れたのです。新幹線に乗りますと、彼は用もないのに先頭車両から最後尾まで最低二往復はします。そうすると乗客は△□○が気になるんですね。僕、自分のスーツを自腹で買ったことないよと彼は言うんです。全部広告宣伝費で落とせるわけです。

実はこの刺しゅう入りスーツを四十七着、この社長は持つていらつしやいました。今度は、それを全部捨てたということでした。

それで、昨年八月に、もう七十をお過ぎになられました。実はこのスタイルで死ぬまでいくんだという異様な姿にお会いしました。

今、真っ赤です。上下真っ赤です。彼は昔からそうですが、ネクタイに

もカフスにもスーツのボタンにも特注で全部△□○が入っています。

昨年二月に彼が掻き集めて送つてきた荷物はそういうグッズでした。

八月にお会いしたときは上から下まで全部真赤。そして靴まで真赤。これも特注の靴で真っ赤でしかも△□○が浮き出ているものでした。特別に頼んで作つたものでもそこまでやるかという、まさに彼は動く広告塔でした。

その彼が会つてゐるなかでこう言いました。いや先生ね、俺ね、八年ほど前に仲間と話しているうちに、福田、お前は全身△□○で身を包んでいるというけれども、中途半端だよなと言われて力チンときた。どこが中途半端なんだ、全身持つてゐるものには本当に全部△□○が入つてゐるのに。

入つてゐないのはどこだと訊けば、お前、パンツには△□○は入っていないよと言われ、そう言われればパンツには入つていなかった。そこでパンツにも△□○が入れないと画竜点睛を欠く感じになるなというところで、パンツにも△□○を入れようと思つたのだが、これだけは相談しなければならぬ相手がいる。家に帰つて奥さんに、実は今日仲間からこういうことを言われてパンツにも△□○を入れたと思うのだけれどいいかな？と相談を持ちかけたら、奥さんがひと言。

誰に見せんよ！
確かにパンツはやたらめつたら見せることはありませんが、それでも拝み倒してパンツにも入れた。赤パ

ンツに金の刺繍です。

これをパーティーの席でも、ほら入つてゐるだろと人に見せるんですからとにかくユニークな方です。

今、広島市△□○株式会社と書く手紙が届きます。下の番地は一切要らない。ただ広島市でいい。ただし条件として郵便番号が正確であるということ。これだけです。日本の郵便番号は凄いのです。普通の方でも町名とお名前だけでも郵便番号が正確であれば本人にピタツと届きます。

地元広島にはマツタという大きな自動車会社がありますが、それに比べれば吹けば飛ぶようなどこにあるかわからない規模の会社でも、△□○というのは非常にユニークで、この社名のお陰で多くの方があ、あの会社かと知つてゐるわけです。これもひとつだなと思ひます。

最近よく会う度に福田さんが繰り返しているのは、やはり経営者の方々は、苦しいとか大変とか言うが打つ手が甘いよね。今までの範疇の中では確かにそうかもしれないが、一歩踏み出せばいくらでも打つ手はあるよね。そんなにええ恰好して商売が回るんだつたら誰も苦勞はしない。恥ずかしいのなんのつて言つてゐるうちは大したことはないね。と次から次と變つた手を打つてきます。

人間というのはその氣になつたらやれるものだなと福田さんを見る度に思ひます。非常に面白い社長さんだなあと思ひます。
経営者の中にはユニークな方がた

くさんいらつしやいます。

先日出合つた社名にえつと思ひました。名古屋のあるホテル方にお話しに上がりまして、ホテルの一角にいろんな事務所が入つてゐるコーナーがありました。事務所のドアをちよつと見て歩いておりまして、株式会社超越という会社がございまして凄ひ会社だと思ひました。

まだ社長と会つてはいませんが、是非会いたいと思ひますね。超越という願望から名前をつけられてゐるわけです。超越というのには非常に拘りがあるのだと思ひます。

大きな借金を背負つている人ほどみんな元氣

日本一の借金王と言われた方ですが、東京の目黒の会員であります小島虎之助は、バブルが弾けました時に三千億の借金がありました。これは個人としては最高額ではなかつたかと思ひます。よくそれだけ借りたと思ひますが、いやあ小島君すごいね。三千億だつたかね。と言ひますと、いや先生、一番借りた時は九千億でした。それだけの借金をしたことがあるが、今思つてもかえすがえす残念だつたのは、あと一千億借りてれば一兆円の借金だつた。とこつと言うのです。

不動産関係のお仕事ですがとにかく馬鹿げた仕事をした人です。というのは三十億とか五十億とかの現金をキャデラックに積んで、地主の所に行つて金を積み上げて印鑑を押させるわけです。三十億のお金を見た

人というのはまずいでしょう。

それを積み上げてこれで買つと、まあ乱暴と言えば乱暴な話です。弾けることを知らずにそんなことをやつてゐるから、気づいた時には三千億を背負つていたわけですね。

今は残り百億。むしろ取られるものはほとんど無いですね。残つてゐるのはビル一個です。南大塚に自社ビルを持つてゐる。テナントが入つてゐまして月間一二〇万円のテナント料が入つてきます。借金の方が大きいわけですから、長いことずっと固定資産税も何も払つてゐないわけです。そういう中で都の方も痺れを切らして一昨年競売にこのビルをかけてゐます。

今、銀行八社が百億貸してゐるわけですから、それに対して毎月返済をしてゐます。百億の金利を払うというのはどれだけの金額になるかということですが、普通では無いのです。これは、決して嘘の話ではないのですが、十億借りてゐるところには毎月一万円を返済してゐます。銀行が、小島さん毎月一万づつ入れてくれればそれでいいと、要は本人が亡くなつたときにチャラになるといふような計算でしょう。

本人が言うには、先生、払う意思は有る。ただ払えない。ということなのですが、聞いているとえつ？というような話です。とりあえず残り百億あるわけですから。

しかし経営者の方々とお話をしていますと、大体大きな借金を背負つてゐる人ほどみんな元氣です。
倫理法人会にも三十億とか五十億

とか百億を超える借金を背負つてゐる仲間がいます。総じてみんな元氣です。

ちまちました借金していく人はみんな落ち込んでいきますね。小さな借金はいくら減つたとかどうとか、見えるんです。大きな借金はもう計算が立たないんです。払える見込みもないし、なるようにしかならないが、命までは取らないだろうと開き直つて生きてゐます。大きい借金した人はみんな元氣で明るいのですが、小さな借金を背負うとこれは駄目です。

小島さんはいろんなテクニクを知つてゐますから、全国から借金の相談に来ます。その筋の方々が絡んだ時はどういふ手を打つ。うまく逃げられるにはどういふ手がある。

今、その筋の方々も、昔みたいなやり方はしないんですね。一番いいのは、彼らに手を出してもらうとありがたいですね。殴られるのが一番いい。殴られるとすぐ病院に行つて、診断書を書いてもらつて、それで警察へ行くところという話は大体引つ込みます。

ですから、今のこういう筋の人たちは殴らない。彼らは殴つたら負けるといふのを解つてゐますから。あの手この手といふいろいろあるのですが、彼と話していると、なるほどね、それでうまく逃げられるのかねと感心しますけれど、とにかくいろんな人が相談に来ます。

それで一番死にたくない借金。これはいくらかといひますと、七、八百万円です。彼は人間というのは